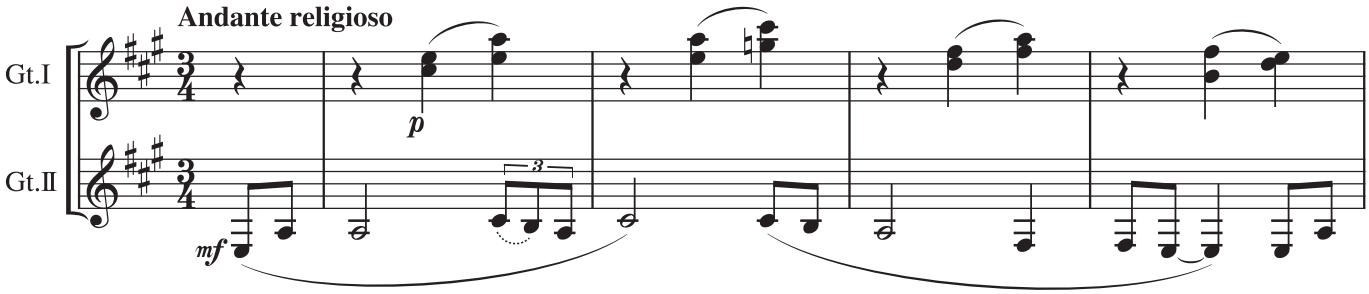
小節の余白

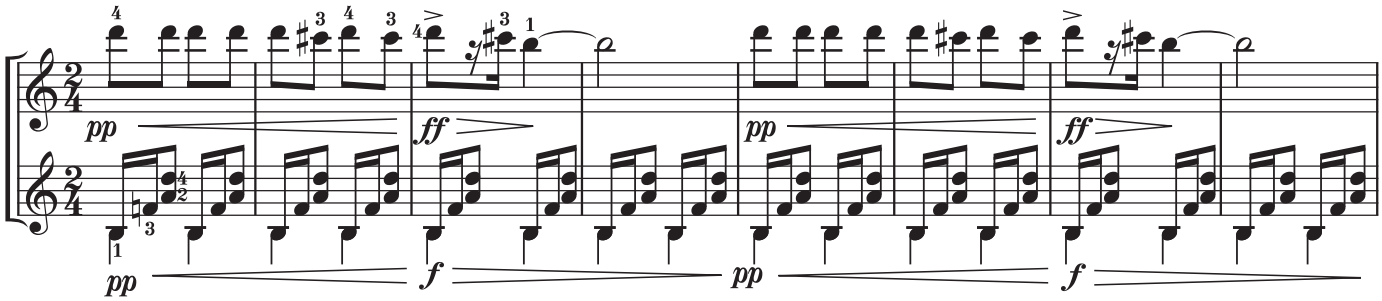


楽譜でもテキストでも、手書き原稿でも出版物でも、すべての書面には余白というものがあります。特に本の場合は綴じ込み部分の余白に余裕を持たせないと、非常に読みにくいものになります。それ以外のページの端でも、ギリギリまで文字や記号を詰め込んでも読めるはずですが、現実には相当な余白が設けられています。過剰な余白からは間延びした雰囲気を感じ、過小な余白からは小難しい雰囲気を感じがちで、多分、人間の目がそういった性質を持っているということでしょう。

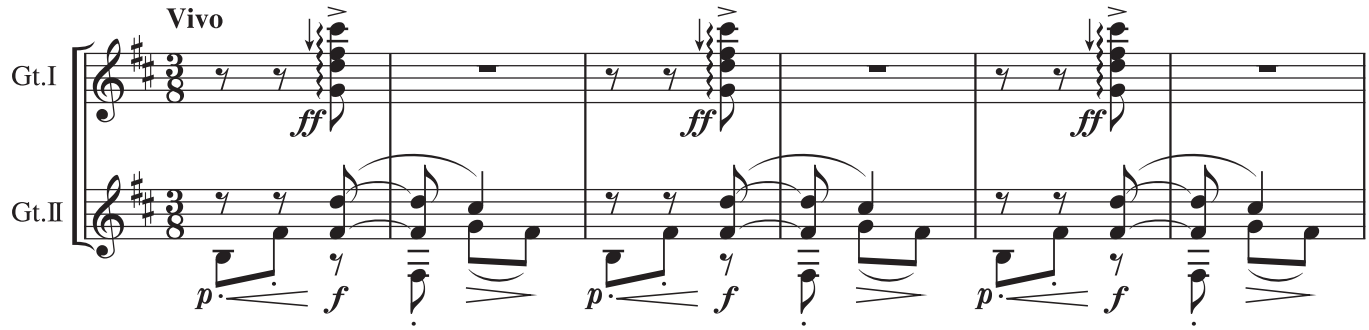
楽譜でもこういった事情があり、ページには必ず余白が設けられますが、小節にも余白が必要です。上の譜例ですと、全体に広々としたレイアウトになっていることから、小節余白も大きく取られています。この小節余白とは、各小節の最初の音符と左小節線との間隔のことで、ゆったりとした流れにふさわしく、通常よりも広い間隔が設けられています。

Finale ではこの余白をファイル別オプションの「音符／休符」の項で設定することが出来ます。その「1拍目までの距離」で管理されるのですが、日本語版 Ver.2011 のデフォルトファイルでは、ここに 32 EVPU という数値が入っています。もう一つ、「次の小節線までの距離」には 12 EVPU が設定されていますが、これは最後の音符の音価とスペーシングに見合ったものに加えて、どれだけの余白を右の小節線との間に設けるかというものです。

本譜例は私の直近の編曲作品で、ここで私は「1拍目までの距離」を 42 EVPU、「次の小節線までの距離」を 4 EVPU と設定しました。同じ Ver.2011 でも英語版デフォルトでは「次の小節線までの距離」はゼロになっていますが、絶対的な適正値というものは無いと考えるべきで、段内の小節数と小節内の音数に応じて柔軟に対処していくのが正しいと思います。



次の譜例ですが、上例は対照的に詰んだ譜面で、この場合は小節余白も出来るだけ削った方が良いということになります。ここでの設定値は「1拍目までの距離」が 18 EVPU、「次の小節線までの距離」が 4 EVPU です。詰んでいるなら「次の小節線までの距離」をゼロにすれば良さそうなものですが、実は正反対で、ある程度の数値を入れておかないと、第2パートの各小節最後の八分音符が右小節線に接触しそうになります。

下の例が標準的な楽譜で、空いてもいないし詰んでもいない状態です。ここでの設定値は「1拍目までの距離」が 28 EVPU、「次の小節線までの距離」が 4 EVPU です。これくらいが普通の設定値と言えるでしょう。デフォルトファイルは標準的な楽譜に焦点を合わせた初期設定を持っていますが、もちろん万能ではなく、良い楽譜を作るためには、事情に応じてそれを変更しなければなりません。また、それとは別にある小節だけの余白を変えることも可能です。「小節属性」の「小節の左（右）のスペース」がそれを担いますが、ここに正の数値を入れれば余白が広がり、負を入れれば狭まります。いつもながら Finale の柔軟性と多彩かつ強力な基本性能には驚嘆します。

2011 年 4 月 梅本雅弘